

# 震災遺構の新たな地平を拓く 一日常に織り込まれた災害伝承

防災学術蓮携帯・特別シンポジウム  
 防災教育と災害伝承への多様な視点—東日本大震災から10年を経て—  
 2021年11月6日（土）オンライン  
 日本災害復興学会 坂口奈央  
 （日本学術振興会特別研究員PD 国立民族学博物館）

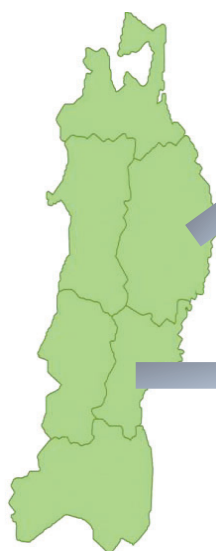
2

## 震災遺構

- 東日本大震災以前まで、日本には建造物として保存された災害遺構がそもそも少ない（8建造物）
- 国は、東日本大震災の津波の被害を受けた建造物「震災遺構」の保存にかかる初期費用を負担することを発表（2013年11月15日）
- 東日本大震災は、震災遺構といかに向き合うかという問題を広範囲にわたり、かつ本格的に初めて提起した災害ともいえる

## 震災遺構として登録

3.11伝承ロード HP参照



県	市町村	分類	遺構名	登録先
岩手	野田	第2	奇跡の東屋	行政
		第2	役場前の被災時計	行政
	田野畑	第3	震災遺構明戸海岸防潮堤	行政
	宮古	第3	津波遺構たろう観光ホテル	行政
		第2	ど根性ボプラ（大船渡市浦浜地区緑地広	行政
	大船渡	第2	茶茶丸パーク時計塔	行政
		第2	潮目	民間
	陸前高田	第1	奇跡の一本松	行政
			陸前高田ユースホステル	行政
		第1	道の駅高田松原タビック4 5	行政
		第1	下宿定住促進住宅	行政
		第1	気仙中学校	行政
宮城	気仙沼	第3	気仙沼市 東日本大震災遺構・伝承館	行政
		第2	岩井崎龍の松	行政
	仙台	第2	仙台市荒浜地区住宅基礎	行政
		第3	震災遺構 仙台市立荒浜小学校	行政
	山元	第3	山元町震災遺構 中浜小学校	行政
		第3	石巻市震災遺構 大川小学校	行政
	石巻	第1	旧石巻市立門脇小学校	行政
		第3	高野会館	民間
	南三陸	第2	南三陸町震災復興祈念公園	行政
		亶理	第3	中浜小学校震災モニュメント「3月11日の日時計」
第2	吉田浜防災公園 お地藏様		民間 <sup>4</sup>	

## 震災遺構の一般的な語られ方

- 保存に積極的な宮城県（2014）が考える震災遺構  
「鎮魂、後世に向けて防災・減災に役立つもの」
  - 3.11震災伝承研究会（2012）「被災下の状況、避難生活、復興への営みを物語る実物資料」
  - 「鎮魂、歴史事実、災害の教訓、復興への象徴の諸点において、後世に伝えるべき歴史的文化的遺産としての高い価値をもつ」  
(史学委員会 文化財の保護と活用に関する分科会提言 2014：15)
- 【定義】被災のインパクトがあるモノ
- 【価値】防災、減災に役立つ、教訓としていかせる（記憶の一元化）  
⇒ 社会的価値のあるものとして公的記憶とのアクセスを可能とする

5

## 「おらほのもの」と呼ばれる地域資源 津波に飲み込まれながらも生き残った自然物



- 岩手県大槌町赤浜地区
- 避難所にもなった旧赤浜小学校よりも、校庭に植えられている桜の木（5本）を「おらほの震災遺構」に位置付ける
- 2011年4月の桜の花をみて「こんな時でも桜は咲くのかと。今年は特別悲しい桜にみえる」
- 最後の花見会となった2014年4月24日夜  
「別れを知っているかのように、最後の力を振りしぼって咲いている。これまでこんなに美しい姿をみたことはない」（大槌町役場fb掲載）

9

## 先行研究 ①シンボル性 ②人生に重ねる

- 震災遺構とは、被災の記憶を想起させるが、とりわけ樹木は、四季折々に見せる姿が変容することからその様相は死者の生まれ変わりとして、また死者を象徴し、死者とのかかわりの中で人びとが生きていく「人間の象徴的実践」（周藤 2014：3）としての意味がある
- 復興に向けた地域シンボルになりうる（佐藤 2017、村田・宮田 2018）
- 人は、人生と結びつけるもの。その風景が突如失われた驚きと失望を機に、人は故郷の風景のよさ、価値に気づく（桑子 2013）
- 海辺で暮らす人びとにとって樹木は命に結び付く存在であり、悲しみの感情とともにプラスの感情を呼び起こさせる機能がある（北村 2018）
- 被災者らを励まし、慰霊の意味を含むものもある（矢守2013）

10

## 三陸沿岸の地域性、歴史性

- 三陸で生きてきた人びとは、海に習い、海と向き合う技法によって経験を積み重ねてきた過去の積み重なりがある
- 社会的、歴史的時間を創造していく時間のダイナミズム性のなかで彼らは、未来へ継承していく地域社会に再生していく責任との間で葛藤し、揺れ動いている
- 震災遺構とは、モノとしての機能を失ったただの瓦礫ではない  
⇒本報告では、従来の震災遺構論で前提とされていた枠組みを「解体」し、そこで暮らす人びとの「総体としての生活」という視点から、彼らの生活史調査をもとに論じていく  
「総体としての生活」から論じることは、こうした災害に至るプロセスの複雑性、多層性を解明し、被災した人びとの経験や人生を映し出す震災遺構という新たな価値の増進にも寄与することが可能となる。

11

## 自然物

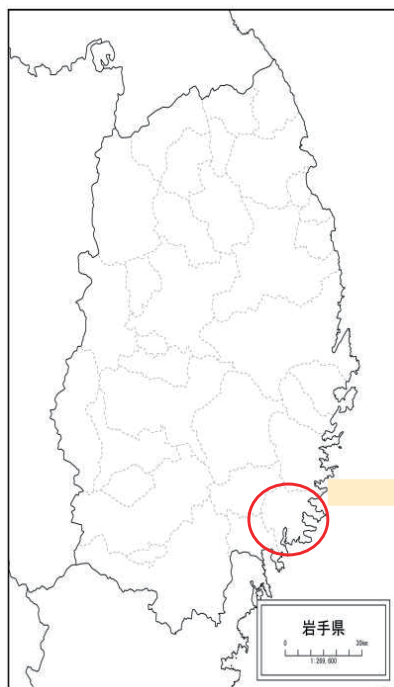
災害を契機とし復興プロセスの中で住民間から立ち顕れる「震災遺構」

被災した住民らは、津波に飲み込まれ、生き残った自然物を「おらほのもの」（愛着のある地域資源）と呼び、震災遺構として表現する。なぜ自然物を震災遺構と位置付けるのか。彼らは、自然物を介して、災害をどのように捉え、どのように語るのか

事例対象地：岩手県大船渡市越喜来（おきらい）「ド根性ポプラ」

調査方法：生活史調査 2020年12月～現在、8名の住民に複数回実施

12

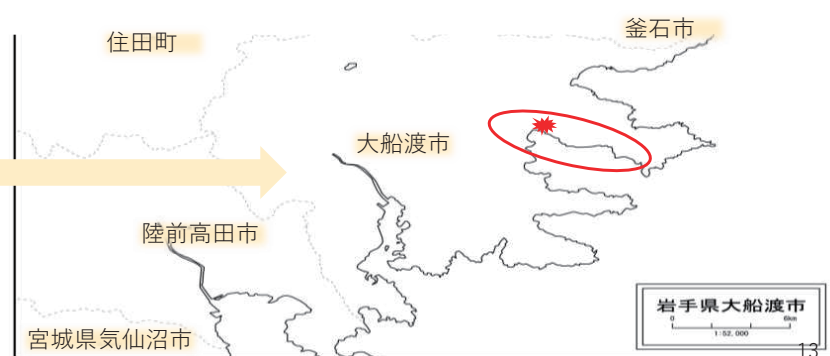


犠牲者88名（越喜来全体の2%）

被害戸数（全壊・半壊）533戸 大船渡市東日本大震災記録誌

三陸鉄道リアス線の三陸駅から続く「銀座」と呼ばれた商店街の並びに、越喜来小学校

北里大学三陸キャンパス（1972年開設、2～4年生と大学院生震災前およそ570人居住）



13

ど根性ポプラ：高さ27m、海から数百mの位置  
三陸駅のホームや数キロ先からも確認できる



17

## 岩手県大船渡市越喜来地区「ど根性ポプラ」

- 個人の所有物（商店経営）周辺にはお店が立ち並び、  
買い物に訪れていた人も「気に留める存在ではなかった」
- 津波であらゆるものが流され、「瓦礫の中にポツンと」立っていた
- 避難所生活で地域の人々が愛称をつけるように（くまとみポプラ）
- 瓦礫が片付けられ、整地にする頃、工事業者に苦情  
住民自らテトラポットを並べ守る
- 所有者が高台移転の際、木を切るなら土地は譲らないと主張

18

## 語りの特徴 ポプラを通して復興過程を ポジティブに語る

【防潮堤の高さ】7m→11.5mへ

「浦浜・泊まちづくり委員会」既存の自治会をもとに構成、毎月1回、  
復興事業の進捗状況を行政と意見交換したり協議をする場

• 津波に耐えた「亀岩」と呼ばれる大きな岩と、そばで根をはる2本の松  
が防潮堤工事の計画予定地に位置しているため、位置変更を請願

• 防潮堤が津波で崩れたことで発生した砂浜を残すため、使える土地を  
少なくしてでも、陸地へ50mバックさせた

⇒住民主導で防潮堤の位置変更を県に認めさせた

防潮堤の高さに関し、県の提案を受け入れることになったが

「結論を出すのが早いんだ、うちは。避難所の時に結論でてたから」

20



## ポプラの会の語りより

- 3.11が近づく春が特別に「生きなきゃと思う」「4月になると根っこの周りに若葉がおがって（育って）るの。孫みたいのがさ。風が吹くとさやさやと音を立てるでしょ。ああ、生きてる、生きてるって」
- ⇒ 日々の変化を観察～生命力を擬人化し、自身の生の定点とする
- 災害遺構について「廃墟、あまりいいイメージがないものが多い。でもうちのポプラは、生きてる」震災後の日常をいきいきと語る
- コミュニケーションツールとしての震災遺構

26

## 考察① 災害をポジティブに変換する装置

- 自然物＝回復する力をもつ＋年月の経過とともに変化する姿に生命力を感じさせるシンボリックな存在に
- 繰り返される時間を再認識し、日常へ戻りたい、戻れる～春夏秋冬、ポプラの葉が落ちる→青葉という円環の時間
- ポプラを震災遺構という枠組みの中でとらえることで、地域だけの記憶から公的記憶へ開放しつつある
- 災害遺構は一般的に建造物＝人工物である。これに対して彼らは、かつての日常や震災など主観的経験を、Life＝人生＋命を実感できる自然物を震災遺構とする「生きられた遺構」
- 避難所での共同生活での何気ない語らいや、まちづくりの会合による対話の場を通じて、少しずつ“わたしたち”を取り戻していく

27

## 考察② 自然物を介した新しい日常の構築 未来を託す

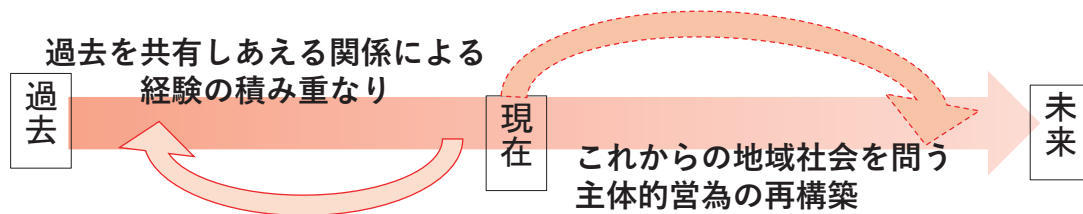
一般的に求められる災害遺構	自然物を含めた被災者にとっての災害遺構
防災や減災、教訓への社会的記憶	同じ経験をした集団に帰属する人びとによる同質的、抒情的、限定的な記憶
記憶の風化防止を目的に保存	彼らにとっては忘れることがない。忘却は自分自身を見失うことになる
(客観性) 事実を忠実に伝える正確な記憶～歴史へ	(主観性) 人生を介した物語 他者に語ることで、希望を獲得
災害を <u>どう防ぐか</u> を提示する記憶	<u>「どのように生きていくのか」</u> 想像と共感を共有しあう記憶として、生活実践の中へ落とし込む

震災遺構とは、三陸沿岸での生活の総体が映し出される媒体

30

## 三陸沿岸の人びとが、震災遺構を、過去—現在—未来時間性、歴史性という観点から意味づけていること

- 「直線的時間」時間的制約や専門用語が飛び交う、復興まちづくりという目的のもとで一方的に進んでいく時間
- 「円環的時間」かつての経験をもとに新たな日常を再構築させていく創造性
- 「定点」円環的時間への道しるべとなるような地域のルーティンワーク



植田 (2016) 川島 (2017) 内山 (1993) 参照 31

### 【参考文献】

- 大船渡市東日本大震災記録誌
- 矢守克也 2013 『巨大災害のリスク・コミュニケーション』 ミネルヴァ書房
- 桑子敏雄 2013 『生命と風景の哲学「空間の履歴」から読み解く』 岩波書店
- 佐藤年緒 2017 「復興に向けた地域のシンボルの生かし方の研究」 『日本災害復興学会論文集』 No.10, pp11-21.
- 丸山真央 2014 「平成三陸大津波と『旧村』の自治—岩手県大船渡市三陸町調査報告(2)」 『 』 pp95-106.
- 村上純一・宮田浩二 2018 「被災地の『レジリエンス』を喚起する施設・空間に関する考察」 『生活科学研究』 40巻, pp1-10.
- 周藤真也 2014 「鎮魂とは何か—東日本大震災の記憶をめぐる樹木の表象について—」 『早稲田社会科学総合研究』 14(3), pp1-23.
- 北村規子 2018 「東日本大震災と樹木」 『聴く語る創る 第27号 自然と民話—蛙・柿・時鳥』 日本民話の会編 pp153-162.
- 宮城県, 2014 『宮城県震災遺構有識者会議報告』 <https://www.pref.miyagi.jp/uploaded/attachment/288105.pdf>
- 小川伸彦, 2015, 「言葉としての『震災遺構』: 東日本大震災の被災構造物保存問題の文化社会学」 『奈良女子大学文学部研究教育年報』 12: 67-82.
- 佐藤翔輔・今村文彦, 2016, 「東日本大震災の被災地における震災遺構の保存・解体の議論に関する分析—震災発生から5年の新聞記事データを用いて—」 『日本災害復興学会論文集』 9, pp11-19.
- Nao Sakaguchi 2020 *Memories and Conflicts of Disaster Victims: Why They Wish to Dismantle Disaster Remains*, *Journal of Disaster Research*, 16(2), pp182-193.
- 蘇理剛志 2015 「地域の歴史へと再定義を」 神戸新聞 2015年12月27日